

# 聞名仏教

第 127 号 毎月発行  
(発行日) 2021 年 4 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

# 長生不死の神方

『長生不死の神方』

佐々木蓮磨

「歳旦さいたんのめでたきものは念仏かな」

これは句仏上人の句であります。世間では元旦をめでたいといって祝いますか？と一度問い返してみると、はつきりとした返事はできないのであります。

昔、一休和尚は、

「元旦や冥途めいどの旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」

と詠よまれたそうですが、よく考えてみれば、いかにもその通りです。新しい年を迎えたと考えればめでたいような気もしますが、一年死ぬのに近づいたと考えれば、まことに淋しい感じがして、めでたいどころか憂うつになってきます。これは新年に限ったことではありません。すべて世間でめ

でたいといっていることは、みな同様であって反面にめでたくないものが伴っているのです。ところが念仏のみは、どこから考えてもめでたくない面がありません。そこで句仏上人が「歳旦のめでたきものは念仏かな」と詠まれたのでしよう。

念仏は何故にめでたいのでしょうか。この意味を明らかにしないと浄土真宗のありがたさがわかりません。近来、新興宗教のほとんどが盛んに現世利益を説くので、真宗も現世利益を説いてほしいと要望する人があります。それはお念仏のありがたさがわからぬからです。わたくしは親鸞聖人のおすすめてくださる念仏ほど大きな功德利益は他に求めてないといっています。では、その功德利益とはいかなるものであるかといえ

の神方」であるといふ神方」であるといふ。仰せられました。すなわち念仏によつて死ぬことのない身にさせていた。だくこととす。これについて少し話させてもらいましょう。

昔、彦根の藩主に井伊直弼いのなおすけ

という方がおられました。ある元旦に家来のものをお招きになり、きようはめでたい日であるから、世の中で一番めでたい釜で湯を沸かして茶を飲ませてやろうといわれましたので、家来

どもは、どんな釜で湯を沸かされるのであろうか、おそらく鶴亀の絵の入った釜であろうと思っていました。ところが、直弼公は、意外にも阿弥陀の三字が彫り込まれてある釜を運ばせて茶をおたてになったのであります。家来のものは、みな不審な顔つきをしておりましたので、直弼公は阿弥陀の意味についてつぎのような話をされたのであります。『世間ではめでたいときに鶴や亀を用いるのは、むか

しから鶴は千年、亀は万年と言つて、その長寿の点をとりあげて祝い事に使うのであるが、鶴にしても亀にしても「死」は免れない。人間世界でもつとも不吉な「死」がともなう以上、本当にめでたいとはいえないわけである。ところが阿弥陀という文字は無量寿と訳して、限らない命——死ぬることのないという意味であるから、これほどめでたいものはないではないか、そこで元旦のお祝いに阿弥陀釜を使ったのである』と。

これはまことに味わうべき話であると思ひます。ことに南無の二字は、その無量寿がわたしのものとなる意味であります。そこで蓮如上人はお文の上で、いつも南無阿弥陀仏のいわれをよく聞きひらけとねんごろに教えてくださったのであります。この六字名号のいわれが聞きひらかれてみると、いまの姿のまま限りなき生命をいただいていることに目がさめます。この目ざめが信心であり、その

# 南無阿彌陀仏の仰せ

信心の喜びが口に現れて念

仏となり、生活に現れてご  
報謝となるのです。したが  
って真宗では念仏を病気な  
おしや、金もうけや災難除  
けに使うべきではないので  
す。むしろ、そうした欲心  
を起す必要のなくなつた  
喜びが念仏なのであります。  
何という広大なしあわせで  
しょうか。

ところが世間では、この  
お念仏を誤解して、死と縁  
の深いもののように考えて  
いる人が多いのです。その  
ために若い人は寺に近づく  
のをきらい、お祝いの席に  
おいては念仏が禁物となる  
のです。こうした誤解は、  
真宗に流れを汲むわれわれ  
から打破していくべきだと  
思います。

わたくしも先年娘の結婚  
のとき、はじめは床の間に  
ツルの画をかけたが、  
やがて思い直して名号にか  
えたのであります。真宗  
の念仏者は結婚式にも出産  
祝いにも、あまた元旦のお  
祝いにも名号をかけて、お  
念仏でお祝いして、世間の  
誤解を一そうしたいことで

あります。

念仏を喜ぶところに不吉  
の死はありません。ただ永  
遠に希望をいだいて前進す  
るのみです。したがって、  
老人は若返り、病人は元氣  
づき、失敗者も立ち上がり、  
いかなる苦難も切り抜けて  
いくことができるのであり  
ます。なんとという不思議な  
おいわれでしょうか。

わたくしは最近門徒に向  
かって「浄土真宗では死と  
いうことばを使わぬように  
しようではないか」と申し  
ております。では息が切れ  
て身体が冷たくなるのは何  
か・と問う人がありますか  
ら、それは「宿がえ」であ  
ると答えるのです。いまま  
では、この肉体を自分と考  
えておりましたため、そこ  
に「死」という不吉な考え  
が生まれてきたのです。こ  
の肉体は借り物です。借り  
物はやがて返さねばなりま  
せん。借り物を返せば真実  
の世界に還えるのみです。  
真実の世界こそ阿彌陀仏の  
浄土でなくてはなりません。

親鸞聖人は南無阿彌陀仏  
のいわれを明らかにするこ  
とによって、真実のものと  
仮のものとを明らかに区別  
してくだされたのでありま  
す。人生一切の苦悩は、真  
実を見失つて仮ものや嘘の  
ものを真実と見誤っている  
ところからくるのです。ひ  
とたび真仮の区別が明らか  
になつて、真実の道に出さ  
せていただくならば、人生  
におけるいっさいの苦悩は  
直ちに解消して、法悦の世  
界が展開するものと信じま  
す。

おたがいに悲しいときに  
も苦しいときにも念仏で慰  
められ、嬉しいときにも楽  
しいときにも念佛でお祝い  
したいものであります。蓮  
如上人は正月元旦に〈道徳〉  
という同行が年始のあいさ  
つに参つたとき「道徳いく  
つになつたか、念仏を喜び  
なさい」とおさとしになり  
ました。これは真宗教徒の  
いくべき道を明らかに示し  
てくださったものといただ  
かせてもらいます。

(了)

①「南無阿彌陀仏という仏

さまはどんな仏さまです  
か？」

②「仏さんはどんなことを  
いつておられますか？」

③「念仏申すとどうなりま  
すか？」

④「私たちはどんなふう  
に迷っているのですか？」

⑤「私たちは仏になれるで  
しょうか？」

⑥「なんで私が仏さまにな  
れるのですか？」

とのご質問について。

①は終わり、先回は②の  
「仏さんはどんなことをい  
つておられますか？」とい  
う問いに対して、南無阿彌  
陀仏の名号がアマダ仏の仰  
せであることを中心に述べ  
ました。今回は、その南無  
阿彌陀仏の仰せとは何かと  
いう本題に入りたいと思ひ  
ます。

南無阿彌陀仏の仰せとは  
アマダ仏の第十八願の仰せ  
です。それは佛説無量寿經

に、  
「たとひわれ仏を得たらん  
に、十方の衆生、至心に信樂  
して、わが国に生ぜんと欲  
ひて、乃至十念せん、もし  
生ぜずは、正覺を取らじ。  
ただ五逆と誹謗正法とをば  
除く。」

と説かれています。この仰  
せをどういたたくかという  
点で、この願を〈念仏往生  
の願〉と受け取り、ここに  
一切衆生が平等に浄土に生  
まれることのできる救いが  
説かれていると了解された  
のが法然聖人でした。

法然聖人は十五才で比叡  
山にのぼり、敵も味方も、  
一切衆生が平等に救われる  
道をたずねられたのでした。  
そしてある時期から源信僧  
都などのご指南によつて称  
名念仏は、衆生が浄土に生  
まれる法であろうと見当は  
ついたものの確信がもてな  
いまま長い間お念仏を称え  
続けていかれました。悩み

ながら仏書を読み続ける苦闘の日々を送られ、ついに四十三才になって、中国の善導大師の著作を繰り返し拝読する中で、お念仏はアミダ仏が「我が名を称えるばかりで浄土に往生せしめる」という大悲の約束のかけられている本願の行（念仏）であつたと身に沁みて感じて、一切衆生は第十八願を信じ念仏をもうさば浄土に生まれることができるということに決定せしめられたのでした。

第十八願は「我が名を称えるばかりで浄土に往生せしめる」というアミダ仏の誓いであると法然聖人が了解されたのは、善導大師の第十八願にたいする解釈によつてです。善導大師は「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」という本願の中心は「乃至十念せん、もし生ぜずは、

正覺を取らじ」であり、この願を信じて念仏申すばかりで浄土に生まれることができる、次のように十八願を解釈されました。それは大師の『往生礼讚』に明確に述べられています。「もし我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること、下十声に至るまで、もし生まれずは正覺を取らじと。

かの仏、いま現にましまして成仏したまえり。当に知るべし。本誓重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得。」

と。これは第十八願の「至心に信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて」は「信ぜよ」と、アミダ仏が私たちに念仏往生の誓いをお勧めになる言葉で、それを「当に知るべし」と外に出されま

た。では何を信ぜよと仰せられるかという「乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ」との誓いで、善導大師は、「十念」は「十声」の称名念仏と了解し、（乃至十念）の誓いは「我が名号

を称すること、下十声に至るまで、もし生まれずは正覺を取らじ」の誓いであると了解されたのです。

そして最後の「ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」は、釈尊が本願を聞く者が五逆を造り仏法を否定する者は救いから除かれると、将来の衆生にそうしないように抑え止められた言葉として十八願に添えられた文であると了解されました。

こうして第十八願は「十声なりとも一声なりとも我が名を称えるばかりで助ける」の誓いであり、どうかこの願を「まさに信知すべし、念仏すれば必ず往生させてくださる」と善導大師は仰せられたのであります。

善導大師が十八願を「我が名を十声一声称えるばかりで往生せしめる」という驚くべき誓いと了解されたのは、十八願に凡夫の往生の道が説かれていることを示唆されていた曇鸞大師や道綽禪師などの先達のご教示と、善導大師御自身の深い宗教経験があつたのこと

です。深い信仰体験によつて仏の大悲の智慧が信心として大師に届いていたのだと思えます。ですから佛説である経文の第十八願文を、善導は頂いた信心の智慧（仏智）で読まれたのでありましょう。仏の智慧でないこのような驚くべき読み方はできないと思います。これによつて一切衆生を憐れみたまふ無窮の大悲が現れたのであります。

そして六百年後の日本の法然聖人がこの本願のあまりにも有り難いお心に感泣されたのであります。そこで法然聖人は第十八願を「念仏往生の願」と名づけられ、「かくのごときのもがらの、たゞ称名念仏の一行を修して、一声まで往生すべしといへるなり。これすなわち、弥陀の本願なるがゆへなり。すなわち、かの大悲本願のとおく、一切を撰する義なり」とも、「本より仏のさだめおきて、わが名号をとなふるものは、乃至十声・一声までもむまれしめたまひたれば、十声

・一声念仏にて一定往生すべければこそ、その願成就して成仏したまふと云ふ道理の候へば、唯一向に仏の願力をあおぎて往生おぼ決定すべきなり。」

ともいわれています。こうして一切衆生の助かる選択本願の念佛を一筋に説かれたのであります。

アミダ仏の本願は、私どもの人間の善し悪し、私どもの心の賢愚、私どもの過去の生き様、現在の生き様、また将来何をなしてしまうかのことまでも、問われないのであります。私どももどこどこまでも引き受けたまい、撰め取って捨てたまわれない、そのお心が「我が名を称えるばかりで助ける」の仰せなのであります。「十声一声、南無阿弥陀仏の名を称えるばかりで助ける」という仰せは切り詰めて云えば「一声となえるばかりで浄土に生まれさせる」であります。これはもはや私たちに何も条件を付けない、ソノママナリデ助

けるといふ、一切衆生をあわれみたまうアミダ仏の絶対の救済を表された言葉なのです。しかも「我が名を称えよ」の仰せを聞いて、これを拒絶することはできませんが、「称えられませんが」とは言えません。戒律を保つと云えば、保てませんといえましょう。経典を読んで理解せよといえれば、できませんと云えましょう。アミダ仏を心に念じてこいと言われたら念じられませんとは云えましょう。有り難いと受け取れよと言われたら受け取れませんかと云えよう。罪深い煩惱の私と自覚せよと言われたら自覚ができませんと云えよう。貧者に施しをせよといわれたら、金がないのでできませんと云えよう。困っている人たちへのボランティア活動をしなさいと云えば、できませんと云えよう。しかし、「我が名を称えよ」といわれて「できません」とは云えませんが、いつでもだれでもどこでも称えられます。口に出せなければ、口の中で南無阿彌陀仏とつぶやくこと

はできません。宗祖は「行の一念と言ふは、いわく称名の遍数について、選択易行の至極を顕開す。」と述べ、「易行のきわまり」であると仰せられています。

汝の責に任じて、汝の一切を引き受け罪を除いて必ず浄らかな仏にする、助ける」と喚びかけて下さる仰せが「我が名を称えよ」の一句であります。

もなりえず、「これを了解せよ」といわれても分からず、「これをせよ」といわれてもできない、このような人間、要するに「弱き人間」をかわいそうだと憐れみたまう、その憐れみのかけられている私であつたと知らされたら、最早このアミダ仏の仰せを「ナムアミダブツ」と受けずにはおられません。親鸞聖人は、自分で自分をどうすることもできない地獄一定の私はもはや「ただ念仏して阿彌陀仏に助けていただく」ほかに道無しと決定されたのです。

り。」（一多文意）と示し、無窮の慈悲と仰せられています。法然聖人も「天をあふぎ地にふしてよるこぶべし。このたび弥陀の本願にまうあえる事を、行住坐臥にも報ずべし。かの仏の恩徳をたのみてもなほたのむべきは、乃至十念の御言、信じてもなほ信ずべきは、必得往生の文なり。」と、第十八願の「乃至十念」の御言を「たのみてもたのむべき」お言葉と感激を以て述べておられます。「必得往生」は「若くは不生者不取正覚」のことで「必ず助ける」という弥陀の決定ですから、念佛の仰せを信ずるばかりであるとの思し召しであります。

に施しをせよといわれたら、金がないのでできませんと云えよう。困っている人たちへのボランティア活動をしなさいと云えば、できませんと云えよう。しかし、「我が名を称えよ」といわれて「できません」とは云えませんが、いつでもだれでもどこでも称えられます。口に出せなければ、口の中で南無阿彌陀仏とつぶやくこと

このようにしてアミダ仏は「十声なりとも一声なりとも、我が名である南無阿彌陀仏を称えるばかりで助ける」という「乃至十念若くは不生者不取正覚」の誓いはどのような者をも、その儘なりで助けるといふ絶対救済の言葉だったので。それを「ああこんな者がありがたい、ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」と受け取られたのが法然聖人であり親鸞聖人でありました。古来真宗で「ソノママのお助け」とよく言われますが、実はここから来た言葉です。

ただよくよく注意すべきは、これはアミダ仏の仰せであつて、人が人に対して、あるいは自分が自分に対して言う言葉ではありません。アミダ仏が一人一人に仰せ下さる大悲の仏智からの言葉であります。人間が自分を肯定し、自分の罪を許すための人間の言葉ではありません。この言葉を人間の言葉にして、自分の罪を肯定し、他者の罪を肯定し、凡夫に居直つたり、慚愧なき露悪者になつたりしかねません。ここは注意せねばなりません。阿彌陀仏の本願のお言葉はいつも仰ぐべきお言葉であり、大悲心をお聞かせいただくお言葉であります。これはアミダ仏の大悲の智慧から来た驚くべきお言葉です。

「こうなれ」といわれて

（了）

### 《永代経法要について》

#### 四月二十二日の念佛寺永代経法

要は、コロナウイルスのリスクが未だ終息しませんので寺内での勤修にさせていただきます。従って講師の先生をお招き致しません。